

米原正義君の「戦国武士と文芸の研究」に対する

授賞審査要旨

本研究は、序章において研究史の概要や研究の課題・方法を記し、本論に入って第一章から第六章まで能登畠山・越前朝倉・若狭武田・出雲尼子・周防大内・駿河今川の諸氏について、それぞれの文芸の受容・進展の様相を述べ、結章で彼等戦国武士の文芸活動の性格・立場などを総合的に考察している。なお、序章において、畠山氏以下の文芸攻究の前提として、南北朝の近江佐々木道誉の文芸を解説し、併せて美濃の齋藤・土岐両氏のそれに言及している。著者のいう文芸とは、和歌・連歌や源氏物語・伊勢物語等の古典文学が主となるが、儒学・有職故実・仏教等の学問・宗教、また歌舞・音曲・蹴鞠・田楽から茶湯・香道・立花・書画等まで広く芸道趣味をも含めている。また文芸を担う戦国武士とは、守護大名・戦国大名およびその重臣をはじめとする領国の武士である。そして研究の対象となる時代は、応仁の乱から織田信長の上洛まで約一世紀に中心がおかれるが、その前後にも触れる。

これまで、和歌とか連歌とか分野別に、或いは源氏物語とか新撰菟玖波集とか項目別に、戦国武士の文芸活動が注意され、また戦国武士を個別に取り上げ、一分野に限らずその文芸活動を論じた研究も少なくない。しかし戦国武士の文芸の内容は幅広いものがあり、彼等の文芸の全体像を把握するためには十分であったといえぬ。著者は関係文献史料を徹底的に調査して多種多様な文芸へ彼等が関与する様相を究明しようとし、また文芸受容層の紹介に遺漏なき

ように努め、受容者が階層的に下降し地域的に拡大していく傾向を綿密に跡づけようとした。

戦国武士の在京中の文化知識層（公家・僧侶・芸能人等）との接触交流、即ち文化知識層に対し、その古典文学等の聴講に熱意を示し、歌書・文学書等の書写を求め、和歌・連歌・猿楽・蹴鞠などの興行に参加するとともに自らもこれらを興行した。応仁の乱以来、一般に戦国武士の在国が多くなるが、文化知識層の下国滞留を捉えて文芸を撰取している。著者は文化人の地方下向滞留を三型に分けて、所領関係によるもの、地方流寓・遍歴過程に属するもの、領国治者としての戦国武士の招聘によるものとしているが、畠山氏の条以下「中央文人在国一覽表」を作製し、前述の型をそれぞれに注記している。以上の文芸の交流・受容について幾多の新事実を追加し、従来の説明の不備を補修し、また誤を指摘し是正を試みたものも少なくない。

戦国武士のうちに大内氏の例に見られるように、在洛中はやく文芸の撰取が行われ文芸的蓄積があつて、積極的に文化人をよび寄せる主体的条件が成立していたものがあることを、特に注意すべきであるとしている。

畠山氏の七尾、朝倉氏の一乗谷、武田氏の小浜、尼子氏の富田、大内氏の山口、今川氏の駿府、また土岐・斎藤氏の革手・加納では、連歌会や和歌会、或いは書籍の書写活動も行われて文化圏が成立していた。文化圏の成立は、山口では康正年間に見られるし、一乗谷では文明年間、その他では永正から天文にかけての時期であろうと推定している。殊に斎藤・朝倉・大内・今川の諸氏では出版文化を生み出し、特に大内氏の場合は重臣の杉氏においてさえ、正平版論語集解の双跋本に基づく覆刻版の明応版論語集解を見るのである。

大内氏の文化については、戦国武士の文化のうち従来とも最も多く論ぜられているが、著者も本研究中で最も多く

紙数をあてている。「大内政弘古典歌書蒐集年譜」「大内文庫蔵書想定」などを作製し、従来の研究を整理し、さらにこれを深めることに努めている。著者は山口文化は古典文化を再生させただけでなく、多面的広範囲に文芸展開の様相を示しており、戦国期地方文化の典型型であるとし、それを詳細に事実をあげて検証した。

戦国武士の文芸受容は、文武両道兼備こそ真の武士とする伝統的意識の流れに添うものであり、また領国を治める為政者としての徳望や教養、さらに権威確立のための必要性を感じたからでもあろうとする。それは戦国武士の信仰は概して武運長久祈願など現実的な性格の強いことにも共通する点である。しかし他方には数奇の心に支えられ、かつひたむきな文芸に遊ぶという文芸受容の例の存することも事実であると指摘している。

さらに進んで戦国武士は諸文化財の蒐集や古典の印行にも努めて、文化擁護の立場を鮮明にしている。中央権力の衰退は中央文化の退潮を招来し、戦国武士が文化の保存興隆に寄与し、また蒐集した古典・歌書が中央に逆流する時代が到来した。新撰菟玖波集の成立に大内氏の意志が作用していること、大内氏所蔵の十問最秘抄や御注孝経が公家により筆写されて今日に伝存し、吉川本吾妻鏡が大内氏家臣陶氏の苦心蒐集したものであることなどはその例である。即ち戦国武士の文芸は、ただ中央公家文化の亜流に終わったというのではなく、その文化的役割を高く評価されるべきものがあると強調している。

以上、本研究は大内氏をはじめ、畠山・朝倉・武田・尼子・今川の諸氏、さらに斎藤・土岐氏を加えて、それぞれの重臣・被官とともに、文芸をいかに受容し展開していったか、その実相を、従来の関係著書・論文を遍く渉猟し、博く文献史料を採訪して、厳密に吟味を加えて論述した労作である。その史料は主要な文庫・図書館および諸大学の

蔵書はもとより、関係地方に所在するものや個人所蔵のものにも及んで遺漏なきことを期している。さらに戦国武士の文芸活動の様相・性格を総合的に考えて、その文化史的意義の解明に一步を進めようと努めた。これを要するに戦国武士の文芸について、現在までの研究の上に立ち、具体的かつ詳細に跡づけ、また新知見を加えて、これを集大成したものであり、学界を裨益するところ大きいものがある。